

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

#### ④その他

##### 《人社系》

#### ●多摩美術大学美術研究科デザイン専攻

##### 「異文化相互批評が可能にする高度人材育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

「クリティカル・ノート」というコミュニケーション・ツールを海外の学生と共にインターネット上に作り上げた。

双方の学生は「クリティカル・ノート」を個人の書棚、デジタル・フォルダのような感覚で、スケッチや作品をアップロードし、制作のプロセスを記録するダイアリーとして使用した。

「国際講評会」開催に先駆けて、双方の学生が、制作中の作品、研究サマリーなどを収蔵しておくデータベースとなった。

教員は、担当している学生のページをチェックすることにより、進捗状況を把握した。教員⇄学生、学生⇄学生間での批評やコメントを掲載できるのが特徴である。

このやりとりが作品制作・研究論文への閃きを誘発する要因になった。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

クリティカル・ノートは学生の利用状況・教員の活用状況を勘案し、使いやすいツールとして段階的に改良を行った。

[使いやすさのための工夫]

- ①静止画像に関しては、現在ホームページやブログなどで使われているほとんどのデータ形式に対応する。動画に関しては当面扱わないが、アップロードとダウンロードはできる。
- ②いつでも手元のPCから閲覧でき、アップデートしたり、整理できる。
- ③文字情報などはいずれも変換できる。
- ④文字検索機能を活用できる(4ヶ国語対応)。自動翻訳は行わないものの、翻訳のためのツールを補助的に搭載する。
- ⑤「クリティカル・ノート」のユーザーインターフェース、外観デザインなどに関しては、できるだけ学生の声を集め、彼らにとって使いやすいものを、全体で作りに上げていった。

[安全のための工夫]

- ①全員が、著作権、情報操作に対しての状況を理解し、参加の許可を得る。

- ② ID、パスワードを用い、運営面の安全性を確保する。
- ③ 授業内では教員は「スーパーユーザー」として、運営責任と権限を持つ。
- ④ 公開レベルを設定することで、授業内での活用と、公開時の見せ方に変化を付ける。
- ⑤ 授業内で使用しているときと、公開時のアドレスを異なるものにする。
- ⑥ ハードウェアキーなどの使用については、「日常的な使いやすさ」を損なう恐れもあるとして、採用を見合わせた。

**(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)**

・授業ツールとしてのクリティカル・ノート

クリティカル・ノートは、授業単位で学生が参加する形になっている。その結果、いわゆる区分け、グループ、フォルダ名というものは、授業名になっている。この結果、メリットとしては、教員が管理しやすい、教室やゼミにイメージとクリティカル・ノートの仮想スペースを一致させやすい、構造がわかりやすい点あげられる。

・カリキュラム化

授業においては、クリティカル・ノートの使用方法、プレゼンテーション方法、展示の仕方、論文や研究課題について連鎖講義を行った。この講義は「アート&デザインⅡ」として平成22年度よりカリキュラムに組み込まれた。

・クリティカル・ノートの学生利用の実際

研究領域によって、コンピュータ環境が異なるため、クリティカル・ノートへの親和性が異なる。ファインアートの学生の多くは、作品というのは、「現物」を指している。デジタル化されたモニター上のイメージは作品そのものではない。学生の中には、クリティカル・ノートを新しく増えた本棚、テーブル、ポートフォリオのようにとらえ、作品ができる度に逐次入力した例もあった。

・ポートフォリオとして活用

多くの学生にとって、ポートフォリオ(作品や制作・研究の歩みがわかる記録集)を制作することは、大学院生活の総まとめとして重要な作業となっている。クリティカル・ノートは、日々、作品を登録することで自動的に組み上げられる「デジタル・ポートフォリオ」とであると学生に紹介している。このポートフォリオは終了後も、プレゼンテーションの場などで多々、活用されている。また、授業には関係なく、自分の足跡の記録のために活用されている。

・国際的なツール

海外提携校にもクリティカル・ノートの参加をうながした。ヘルシンキ芸術デザイン大学は大変良く理解していただき、国際講評会の1ヶ月前には、ほとんどすべての作品が登録され、本学教員は、本番を待たずしてこれらの作品の全

体像を把握し、簡単な批評コメントなどを書き込むことができた。それに対する先方学生、教員からの返信もあった。インターネットの発達した今日であっても、遠く距離を飛び越えてひとつのことを成し遂げるダイナミズムを感じる瞬間であった。